
魔法少女リリカルなのは～魔の王となる少年～

無駄に訓練された駄目人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜魔の王となる少年〜

【Nコード】

N0113P

【作者名】

無駄に訓練された駄目人間

【あらすじ】

地獄の底『コキユートス』でまったりだらだら過ごしていた少年が地獄からの囚人3人を捕まえるために、神達に命じられ海鳴市に転生する

様々な出会いを経て、果たして少年がどう変化していくのだろうか？

プロローグ：これは転生になるのだろうか？（前書き）

初めまして駄目人間です

この作品が処女作となります

プロローグ：これは転生になるのだろうか？

深い深い地獄の底に、その少年はいた。

生前に犯した罪の重さが最も重いものが送られる場所『コキユートス』

その場所に少年はただ存在していた。

「なあ、ルシファー」

コキユートスに半身を氷漬けにされた、墮天使に話しかける。

「なんだい？我が友」

「もしも、俺がここから出ていくことになったら、お前は どうする？」

少年は未来を見通す力があつた。

こんなことを言い出したのは、自身の未来を理解しているからだ
ろう

「罪人じゃないのに勝手にこっち来て、勝手に消えていくだけだろ？私には関係ないね。一応、元天使ってことで祝福はするけどね？」

まったく素直じゃない、墮天使である

「ふふ、ありがとうと言っておくよ」

少年は地獄の底から、光り輝く世界に消えていく

光り輝く世界では、現われた少年を囲むように12神会議のメンバーがそろっていた。

ちなみメンバーは13人いたりする。

「やあ久しいね？神達」

少年は主神を軽く眺めると、にやりとする

「ああ、君もどうだったんだい？地獄は？」

この神達は、俺をまた働かせようとしてやがるのか……
まったく勘弁してくれよ……

「んで？依頼内容はなんだい。俺を呼んだんだ、どうせ仕事だろう？」

「とある世界に、転生してほしい」

少年は目を細める

「とある世界に地獄の囚人3名が逃げたという話を聞いたそれと関係が？」

主神が重い口を開く

「ああ、それがただの罪人だったらよかつたんだけどね？」

要するに……アレがらみか……

「OK、アレがらみなんだ任務終了しても、寿命が尽きるまで休暇をもらうぜ？」

「わかつた。それで行く世界なのだが……リリカルなのはだ」

「うわああ……まためんどくさいとこにと、少年は思いつつも顔には出さない

「前提条件1、無尽蔵の魔力。前提条件2すべてをなし得る力、最終条件ルシファアを俺と共に転生させること」

神達はざわめきだす

口々に

「あの反逆者を？」

とか何とか言っている。

少年は何も言わない主神以外を、睨みつけながら吠える

「お前らが、あいつを反逆者に仕立て上げたんだろ？。なあ、主神よう。純粋な神じゃないあんたならわかるだろ？」

「ふふ」

主神が少し微笑む

「ああわかるとも、彼らが危惧していることもわかってやってくれ」「アイツが……復習に燃えるとは思わんのだけどなあ」

少年は、まあいいとつぶやくとゆっくりと歩き出す

「じゃあ行ってくるよ。ルシファアの話は、要検討でいいよ？ただいてくれたら、俺のテンションがマツハで有頂天になるだけだし」
謎な名言を残し、少年は天界を去った。

その日、海鳴市に一つの命が生まれる。

膨大な力を持って・・・

第1話・幼き日の邂逅（前書き）

駄文ですが、どうぞ

第1話：幼き日の邂逅

西島 匠として生を受け、6年が過ぎた。

見た目は茶色い髪に、黒い瞳の髪の色素が薄めのどこにでもいる男の子だ

一応、記憶の方があるので天才児として君臨してもよかつたのだが、俺の周りが騒がしくなり有名になることはどうしても避けたかった。

何故かつて？

有名になる テレビ等で紹介される 顔が割れる 敵にあつた時にすぐ正体がばれるといったぐあいになると思うからだ。

そんな短絡的思考から、今ものすごく悩んでいるわけだが・・・公園で一人さみしそうな雰囲気を醸し出す女の子がいた。

悩み事をそつちのけにして、俺は彼女の元に行く

「やあ、隣いいかい？」

俺はそんな彼女に吸い寄せられるように、近づいて行く

決してロリ&mp;ペドではないぞ？

「なあ、なんでそんなに寂しそうなんだ？」

彼女は自分の心の内を看破されて驚いたのか、眼を見開き、俺のことを見る。

「赤の他人に話すことじゃないか・・・じゃあさ、僕の話につきあってくれないか？」

驚きの顔から、戸惑いの顔に変わる。

ころころ変わる表情を見てみると、なんだか楽しくなってきた。

「とあるところに、男の子がいました。その男の子は暖かい家族に囲まれて、幸せに生活していたそうです。ある日のこと、両親が事故に巻き込まれて死んでしまいました。親戚も彼を引き取る事を拒否し、彼はめでたく寂しい男の子になり果ててしまいました。彼が途方に暮れていると、一人のさみしそうな少女に出会います。彼は

今後のことを考えるのをやめ、少女に声をかけたのでした。」

俺はそこまで言つと、話をくぎる。

彼女は優しい子なのだろう、その話を聞いて涙を流していた。

「どうだった」

「それって・・・きみの「ストップ、あくまでもとある男の子だ」

彼女は誰のことを言っているのかわかって、いいかけたので止めておく。

「私は・・・」

そこから、父親がけがをしたことと、頼れる兄ロッドが剣術の修行で悪鬼羅刹化して近づくけないことなどが聞かされる。

「君も苦労しているんだね？」

俺はそういつて、微笑みかける

「あなた、ほどじゃ」

彼女は顔を真っ赤にして、否定する。

ふむ、女の子の方が早く育つとは言うが、この反応は早すぎないか？まあいい

「僕はなにも苦労していないよ？」

苦笑いしながら、彼女から目をそらす。

彼女の光を直視するのは、俺には少々辛すぎた。

「私は高町 なのは。貴方は？」

「僕？僕は・・・名前が変わりそうだから、匠とだけ」

俺は名を名乗ると、にやりと口の端を上げる

「そつだ、いいものを見せよう」

俺は両手を合わせ、ぱんという音を鳴らせる。

何故か指パッチンができないから、手を叩くしかない

俺の体から、何か発行する粒子が立ち上がり、俺の体が透けていく

「君は力を持つ覚悟はあるかい？答えは・・・また逢う時にでも」

そういつと、その場から完全に消えた・・・

俺は一応、両親から家を相続しているので、家はある。

「だけど、前世の生活能力皆無な俺はどうすればいいか迷うな
ピーンポーン、インターフォンが鳴り俺はめんどくさいながらも、
モニターをちらりと見る」

「そこには、地獄の底で見知った顔がいた。」

「いてるかいい？匠。」

「ルシファーが何故か立っていたんだ……」

「俺は彼を家に上げると、ため息をつく」

「冗談で言っただつもりが、主神のやつマジでやりやがったのか」
「ルシファーはコロコロと笑う」

「お前のサポートと、金銭面の問題を解決するために送られてきた、
天野 使途だ。よろしくな？」

「なんだよその、あからさまな名前は……ん？」

「未来が……微妙に変わったただと？」

「天野グループという会社ができ、俺が金持ちの養子になってる
だ……」

「まったく主神は、何がしたいんだ？」

「今の主神は、軽くお茶目だからね」

「だねえ……」

「お茶目ってレベルじゃないと思うけど」

「で？一人目の罪人が出るタイミングとかわかってるのか？」

「俺は今日の集会のことを忘れていたのに気づく」

「あ……ついてこい」

「俺は壁をおもつきり殴ると、地下へと続く隠し階段が現れる」

「なんだよその無駄な仕組み」

「俺は階段に足をかけながら、笑う。」

「しかも核シエルターだぜ？」

「などと、さらに無駄さをアピールしておく」

「一番下まで降りると、扉がありホテルのホールのような広さつを
持った場所に出た」

「ようこそ、俺の城へ。歓迎するよ、我が友」

俺がはいつてきたことにより、集まっていた数十名の眼が一斉に突きささる

軽く深呼吸し、マイクを片手に取った。

「管理局を内部から変える。そんなガキの絵空事にみんなついてきてくれて、本当にありがとう。これより我ら『見境なき魔導士団』はファーストフェイスにはいる。」

お という雄たけびがそこらじゅうから上がった。

「各位、例の陣をと内部データの抹消を頼むぞ？それから、フロロジエクトに関するデータ収集も頼む。」

これから起こるであろうこと、これから始まることに対する準備フェイズ。

それがファーストフェイス……

「さあ、未来を変えるために『Trick or Treat?』をはじめようか。」

俺は口の端をあげながら、そう宣言した。

瞬間、何十人者の魔導士達が時空転移していく。

ここから始まる……

悲しい終わりをする物語を、ハッピーエンドに変えるための介入が……

第1話・幼き日の邂逅（後書き）

短いなあ・・・

第2話：誘拐犯？俺の敵じゃねえ〜（前書き）

何とかジエバンニできたようだ・・・
相変わらず駄文OTL

第2話：誘拐犯？俺の敵じゃねえ！

俺の名前は、天野 匠。

たった一話で名前の変わるといった、奇妙な経験をした主人公の一人さ。

つたく、お茶目な主神のせいで大変だったよ。

親戚連中は、天野の養子になると聞いた瞬間すり寄ってきて気持ち悪かったOTL

まあそんなことはどうでもいいんだ。

大グループの社長の息子になった俺は、私立聖祥大附属小学校に入学することが決まり数日前から学校自体は始まっているのだが・・・

正直、小学生ぐらいの授業なんて暇すぎてやってられないので、サボって公園に来ている。

「ふあああ」

少し肌寒いが、普通に過ごす分には心地いい風が頬をなでる。

眠い・・・

ちなみに、聖祥の制服は着る気が起きないので私服だ。

あんなの着ていたら、金持ちですどうぞラチってくださいと言っているようなものだからな・・・

俺は暇になってきたので、ブランコが限界まで俺を持ち上げたところで飛び降りる。

一回転し、両足をそろえて華麗に着地するとそのまま何事もなかったかのように、倉庫街へ歩き出した。

たしか今日は、すずかとアリサが拉致られる日だったはずだ。

「さあ、フラグたてに行こうかな？」

断じて言うが俺はロリコンでも、ペドでもないからな？

助けた結果、フラグがたっちまうだけだからな（キリ）

あれから数時間がたち、目的の二人がはいってきた何故かなのがついてきていたが。

あれ？未来が変わっている？

「聞こえてるか？匠」

俺は親父の念話をとらえる

「ああ聞こえているぜ？で、なんだ？」

「どうやら、お茶目な神様が因果律を捻じ曲げたようだ。時の神が俺に頭を下げてきたよ。」

つつことは、こつからは俺の行動次第ってことか……

未来視はいやに体力を消費するし。

俺は気配を消して、誘拐犯の後ろについて堂々と入っていく。

そして誘拐犯となのは達のあいだに割り込む

「さあてと、動かないでねえ」

俺はそういいながら、気配を出す。

常人には突然現れたように見えたのだろう、なのはには見えていたみたいだが。

「後、手に持つてる拳銃類は俺には効かない……」

言い終わる前に、俺の額が打ち抜かれる。

三人娘の悲鳴が同時に聞こえる。

あれ？この時点では仲良し三人娘になってはいないはずんだけど、なんでこんなに息がぴったり合ってたんだこいつ等？

「いってえなあ。いきなり眉間をぶち抜くなんて、マナーがなっていないだろコラ」

ガキだからって、この程度でくたばるって思われたなんてなあ……

「ぶちのめすぞ、蠅ども。誘拐犯と愉快犯どっちが恐ろしいか教えてやる。」

俺の体がぶれる。

魔力を体中に流し、身体能力を限界まで強化しているだけなのだが……

もともと持っていた、体を動かす知識と相なつてか神速の域には達していないが常人の眼の動きではとらえきれないほどのスピードとなっている。

一人、また一人と倒されていく仲間を見てか、最後に残ったやつは顔を真つ青になりながら震えている。

「さあさあさあ、お前はどんなやられ方がいい？」

一人は腕を2、3箇所複雑骨折、一人はろつ骨を数本折られて虫の息、さらに一人はひざの皿を割られ足の指が全部あり得ない方向に曲がっていた。

すべて俺が一瞬のうちにやったことだ。

結構な人数がいたので、一人一人やっていると、面倒な状況になる。

本来なら、一人ひとりじわじわとやってやるつもりだったが・・・

仕方がないので、最後の一人には死んだ方がましだと思うような恐怖を与えてやる。

黒い笑顔で、俺がわざと足音を鳴らしながら男に向かって近づいて行く

「まずは一本」

俺の体がぶれたと同時に、男が手を押さえてうめきだす。

ちなみに、マツハで人差し指を追っただけだが・・・

男は逃げようとするが、俺は倉庫の扉に回り込む。

「あれれ？逃げちゃうの」

また俺の体がぶれる、今度はうずくまり足を抑えている。

見ると足があり得ない方向に曲がっていた。

「楽になれると思うなよ？」

ちらりとなのは達を見る、なのは達は都合よく失神しているみただ。

「ふふふ・・・なあアンタ。」

男は俺を見上げる。

「生きたいか？」

「た……たすけてくれ。何だつてするから。お願いだ。」
俺はさすがの男を黒い笑顔で一蹴する。

「だゝめ」

男のもう一本の脚がおられる。

「さてと……指折りを再開しますか。」

それから数分後、なのは達は警察に保護をされる。

これは到着した警察談のだが、まるで悪魔が出てきたような惨状だったそうだ。

俺はそれを見届けると、苦笑いを浮かべながらその場を後にする。
絡まれるのがいやだった俺はそれから三年ほど休学してた。

多分初めて学校に行く日は、なのはが魔法少女……いや魔砲少女として覚醒する日だろうと思うが……

はやくバイクに乗りたい……隼やZZRが目につくのに乗れないなんて……

いやイナズマでもいいんだけどね。

Sさんが出しているバイクはどれも最高……

いかん、趣味がはみ出てしまった。

第2話：誘拐犯？俺の敵じゃねえ〜（後書き）

基本的に主人公はドSです。

行き過ぎているとは思いますがドSです。

もっと詳しく書きたかった（お前の趣味じゃねえか）のですが
少々グロテスクになるのであえて書きませんでした。

どこまでが、セーフなんだろ？

第3話：原作開始、さてどう動くのか？（前書き）

更新ペースは遅いですが長い目で・・・
また駄文です

第3話：原作開始、さてどう動くのか？

久しぶりに、俺は海鳴の土地を踏む。

妙な気配を感じ、俺はにやりとする

ほう・・・これはユーノか

じゃあついに始まるんだな？

あ、デバイスないから介入できないわ。

「まいったなあ、どこかにデバイス落ちてないかなあ。」

『気をつける匠。そっちに強大な魔力反応が・・・』

俺の前にいきなり鍵が現れて、バチバチと火花を散らしている。

俺は少し生温かい目で見守っていると、鍵からいきなり主神のホログラムが現れた。

「やあ、君のためにデバイスを組んでおいたよ？時の神にがみがみ言われながらね。」

まるで感謝しろよ？と言わんばかりの口ぶりだが・・・

絶対こいつは、面白がって作ってやがったな？どう考えても嫌な予感がひしひしするし、さらには何か変なオーラ放ってますよ？

「そいつの名前は、お前が決めてやってくれ。じゃあな」

ホログラムは片手をシュタッと上げ、消え去った。

うん、今度しんだら覚えておけよ？

「さてと・・・そのデバイスはインテリジェントデバイスか？」

<はい、マスター>

うん、なんで日本語使用？

<マスターには、生体デバイスがセットされているので、翻訳がなされているでしょう。現に、私にはマスターが使用している言語が英語に聞こえています。>

へえ、デバイスってそんな能力あったのか・・・あれ？

「ちよつと待て、生体デバイスって？」

<体の中にデバイスを埋め込むために、デバイスを生体化させたも

のです>

つまりは・・・あの主神、絶対しばく

「ところで、お前の本体ってどんな感じなんだ？」

俺が問いかけると、鍵は剣となる。

フム・・・アームドデバイスか？いや、この時点ではやっぱりインテリジェントかな？

「あれ？カートリッジシステムがないぞ？」

<私には1stフォーム、2ndそれから3rdフォームがあり、2ndフォームからカートリッジシステムに変更されます。

そして、各フォームにも三形態、通常、破戒、殲滅のモードが用意されています。>

んゝ三段階変身か・・・しかし、モードチェンジの響きが不気味すぎるんだけど

「よし、お前の名は『テイルヴィング』、略してテイルだ。」

<了解しました。>

ちなみに由来は、三回願いをかなえその後必ず、持ち主に破滅を運んでくる魔剣から名前をとってきた。

「さて、テイルはじめようか？」

俺はテイルを持ったまま、木に登り仲良し三人娘を見下ろす。

淫獣は無事に？保護されているようでよかった・・・

さあてと、なのははともかく後二人が巻き込まれるのは、あまりよろしくないなあ。

何か真っ黒いなにかが、じつと3人と一匹のことを狙っている。

「行くぞテイル」

<はい、set up.>

手に剣のずっしりした重さがかかり、バリアジャケットが展開される。

黒を基調にしたコートに黒いズボン、そして顔には黒く顔覆うバイザーが取り付けられていた。

「結界」

<了解しました。>

いくらなのはとユーノでも入れないような、結界が生成される。

「すこし、活動ができなくなる状態にする。」
俺の体がぶれる。

「？ソレは魔力の海より現われ、汝の周りを取り囲む者也。」
俺の放出した魔力は、ひも状となって繭を作るみたいに取り囲んだ。

「<凍結>」

二人？の声が重なり、繭が凍結していく。

レアスキル『凍結』何故か使用できたので、冷静に考えたらこれは・・・

<私必要ありませんね>

あ、わかった？

魔力放出はデバイスなしでできるし、凍結は個人の能力だしなあ・・・

「とりあえず、おいおい何とかするとして・・・しばらくは、物理攻撃でいけそうだし」

匠・・・得意魔法、身体強化

<脳筋(ボソ)>

その瞬間、なのはが寒気を覚えたのは、また別の話・・・

PS：早く他の人とOHANASIしたいです。

その日の午後、俺は動物病院がよく見える家の屋根でこっそりとなのはが来るのを待っていた。

『僕に力をかしてください』

来た、ユーノの念話が始まった・・・

遠くから、なのはが走ってくるのが見える。

<マスター、今回は介入する気はないのですね？>

俺は少しうなずく

「ジュエルシードだけ回収させてもらう。アレは、俺の方の仕事を

終わらせるためにも必要なものだしな。」

そんな話をしているうちに、なのははユーノを抱え走り出した。

「行くぜえせつ」

< set up >

おいこら

黒衣の魔導士が現れる。

「我、使命を受けしものなり」

「我、使命を受けしものなり」

「契約の元その力を解き放て」

「契約の元その力を解き放て」

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

「この胸に」

つと始まったか

「この手に魔法をレイジング・ハート set up」

白を基調にした聖祥の制服を改造したようなバリアジャケットに、先に月のような形をし真ん中に赤い球体がある杖が現れる。

「ふええええ？」

なのはの叫び声が上がリ、俺は苦笑いをする。

プロテクトだけで、あの怪物を弾けさせる……

なんていうバカげたやり方だよ。

< 助かりたい意思と、AIが共鳴してあり得ないほどの魔力を放出したんですね >

なるほどねえ。おっと、先に封印されてしまったてはたまらん。

俺はなのはと、黒ずくめの怪物のあいだに立つと剣を向ける。

「ジュエルシード、シリアル21封印」

< 了解しました。 >

その間一瞬、一瞬にしてジュエルシードがただの石ころに変わる。

俺はそれを拾い上げると、デバイスの中に収納した。

「貴方は一体」

ユーノは警戒したように俺を見てくる。

「初めまして、なのは嬢。そして・・・なんだっけ？まあいい」
「なのはは何がなにだかわからないといった風に、あたふたしているが。」

ユーノは冷静だ。

「ジュエルシードをどうするつもりですか？」

俺は、あらかじめ考えていたセリフをつづる。

「狂った願いをかなえる、忌まわしき器。そいつを封印し、こいつを狙ってくる奴をたたきのめすのが俺の仕事なんでね？」

俺はそれだけ言うと、バイザー越しに微笑みながら飛び立つ

「もうすぐ警察が来るから、逃げたほうがいいよ」

何かを叫ぶユーノ、あわてているなのはを残し俺は生家に戻る。

さてと・・・明日からひっかきまわしてやんよ。

第3話・原作開始、さてどう動くところか？（後書き）

うーん、ここら辺は介入のしようがないからなあ

第4話…のらりくらり進もうか？（前書き）

だらだら、マイペースになってきました・・・
何か大きい変動が付けくわえられる事件ないかなあ？

第4話：のらりくらり進もうか？

復学にあたり、能力試験とかあるのだがそれを苦もなくパスし、聖祥に俺は戻ってきた。

ちなみに、現時点で俺は博士号を持っていたりするのだがそれは別のお話

俺が教室に入っていくと、あの時のことを覚えていたのか、仲良し三人組が少しだけ目を見開いた。

「天野 匠です。しばらくのあいだ、海外に留学していました。これからよろしくお願いしますね？」

俺は指定された席に座ると、ため息をつく。

正直、昨日家に帰ってからが大変だった。

何故か、プロジェクトFの概要が俺の端末に届いており、管理局がプレシア・テストロッサにやったことについてもついでのように書かれていた。

資料全部に目を通していたので、寝不足だったりするのだが・・・

昼休みごろに、意識が戻り仲良し三人娘に引っ張られていく

「アンタ三年前の」

俺は口笛を吹きながら、眼をそらす。

「ごまかさない」

俺は本日二度目のため息を吐くと、口を開く。

「眉間に銃弾受けて無事な奴なんて、居ないよ。たとえばそれが、吸血鬼でもね？」

月村がびくんとする。

ふむ、なるほど・・・トラハの設定を引き継いでいるのか。

「・・・」

沈黙が流れる。

「・・・」

「そういえば、昨日動物病院で事故が起きたらしいな」

「そうだ昨日のフェレット、大丈夫かな？」

俺く一越えられない壁一<淫獣

ですか・・・あれ？何か涙が・・・

「フェレット？」

「うん昨日、なのはちゃんが傷だらけのフェレットを見つけたの」

さてと・・・これではのはの印象に、俺がフェレットのことを知らないと入れればいいんだけど・・・

「へえ、一回でもいいから見てみたいなあ。君たちが騒ぐほどだ、相当可愛いんだろ？」

なのはが汗をかきながら、挙動不審になってる。

「えっと、いろいろあつて家にいるの」

以下テンプレのような説明が続く

俺は見えないようにあくびをする。

『マスタージュエル・シード反応です。』

っち・・・仕方ない

「ちよつと、用事を思い出した」

俺は校舎の中に入ると、腰につけていた待機モードのデバイスに触れる。

「1秒間を1時間に変える結界を張ってくれ」

<了解しました。魔力確保開始、動作安定、世界介入開始>

俺はバリアジャケットを展開し、剣を抱える。

「<転移>」

転移先には猫をベースにした化け物（虎を凶悪化させたもの）がいた。

<怖いですね>

あれ？あれ？そんな反応？

俺は虎の異常発達した爪を剣の部分でそらす。

<バインド>

バインドが虎にかかるが、あっさり抜けられる。

「おいおい、マジかよ……」

<どうやら、とりこんでからも自己進化するために、魔力を垂れ流しているみたいですね？あんまり強い魔力をかけると、次元振が起こりますので物理攻撃がお勧めです。>

解析ありがとう、でもな……

「だったら、モードチェンジ『破戒』」

剣がグニヤリと曲がり別の形をとっていく

形が銃になった瞬間固定される。

「何だこれ？」

俺は牙を蹴り、後ろに逃げながらそうつぶやく

<デザート・イーグルですね？神いわく、最強のハンドガンだうまく使えよ？だそうです>

うん、知ってる。

でも、これ反動やばくなかったか？

「で、能力は？」

剣の時の硬さが生きているのかあっさりと、虎の爪を弾ける。

長さがないので、怖いが。

<魔力によって、弾を生成、飛距離、弾道速度なども魔力で調整できます。そのための演算は、私がやりますので、この形態の時は空を飛ぶ身を隠す等の魔法ぐらいしかつかえないので、注意してください>

俺は息をのみ込む。

久しぶりに持った、銃の感覚に内心ひやひやしながら、片手で構える。

虎が俺にかぶりつこうと、大口を開けこちらに向かって飛び込んできた。

「出力は最大」

<弾生成、弾道速度 Mach 10、使用者の周りに障壁展開……
・・Fire>

虎の脳天に着弾し、それでも止まらなかった銃弾がしつぽまで行

く。

速過ぎたせいか、衝撃波をまき散らしながら飛んでいったので虎が粉々になってしまったが……

「……何だこれ？」

<『破戒』の適正出力ですよ。この形態は着弾すれば必ず相手を破壊できる。質量兵器は魔力障壁等で通常抑えられますが、この形態の私はそれすらも貫くことができます。>

いややりすぎだから……

剣に戻ったテイルを構え、俺は眼を閉じる。

「ジュエルシード……もう封印しましたよ？」

おいこら、何か決め台詞言わせるや。

「んじゃ、転移」

転移で元の場所に出た俺は、バリアジャケットを解除し結界を閉じる。

数分間の出来事なのに、出来事のはずなのに……無償につかれたのは気のせいかな？

『気のせいではないかもしれませんが。弾一発の射出に、膨大な魔力が必要になりますので』

急激な魔力が出ていったことに、俺の体が疲労を覚えたのか……

なれないとなあ。

さてと、@2時間ぐらいでアレがあるのかあ……

その後なのは達と合流した俺は、くそだるい……失礼、授業を受け何故か一緒に帰ることとなり、別れた。

『マスター、ジュエルシードの活動が……』

「だよなあ〜（わかっている。だけど……交渉には2つぐらいで十分なんだよ。）」

俺はにやりとする。

ちなみに、今回封印したのが20だからなのはの負担が薄れたかな？

「じゃあ、僕はこの辺で」

俺はそういうと、なのは達と別れ神社のさい銭箱付近に隠れる。

子犬がジュエルシードを加えた瞬間発動……

<行かないのですか？>

「ん、俺は管理局でてるま……あ、どうしよなのはとフェイトの次元振までお休みする予定だよ？」

俺は力ギを握ると、剣の状態にする。

<また持病が出ているのですか？>

俺の持病に、あきた、面倒くさい、かつたるい、眠いが存在するが今回は、それらは出ていない

「さつきも、交渉って言わなかったっけ？」

<言っていましたね。>

そんなこと言っている間に、防衛戦が始まる。

「うわあバリアって、あんな破壊力あるっけ？」

見ると、バリアだけで戦ってる魔法少女がいた……

<マスターもできませんか？>

「俺？無理だよ。魔力制御が得意じゃないのに」

俺は魔力制御ができ過ぎて、そういう過剰に魔力をかけるのが苦手なタイプな人間なのだ。

「決着がついたみたいだな？」

俺はシリアル16が封印されたのを見て、軽く頭をかきながら帰宅した。

第5話・日常（前書き）

相変わらず駄文です

第5話・日常

さあ、一緒に日常を謳歌しようぜ。

つつても、やることがないわけだけでも……

俺は一人さびしく散歩していると、元気のよさそうな声が聞こえてくる。

それにつられるように、俺の体がその場所に向いていた。

着くとそこはサツカーのグラウンドがあり、なのは達が観客としていたので声をかけておくことにする。

「にやつす。みんなのアイドル匠さんだよ」

なのは達は驚いた顔をしながら俺を見る。

「な……なんでアンタがここにいるのよ。」

「匠さんは研究室で、一泊した帰りなのでしたまる。」

「研究室って……」

いやあ、まさか米国にいた時に知り合った日本の教授に、こっちに戻ってきてるって知られていたとは失念だった。

呼び出された俺は、明日休みなのをいいことに研究資料をずっと読んでいたつけ？

「へえ、そのなのはが抱いているのが、例のフェレットか（ユーノ・スクライア聞こえてるか？）」

（なんで、僕の名前を）

「ユーノ君っていうの。」

「へえ、可愛いなあ（いや、念話で魔力資質あるやつ呼んでたみたいだから、ちょっと調べてみただけだよ？）」

俺は軽く笑う。

「上手く話を変えたけど、研究室ってなんなのよ」

（何が目的ですか！）

「うち、このお嬢様め。」

「ああ、知り合いの教授とお話してただけだからね。特に面白い

ことでもないよ？（目的？ハッピーエンドだ。）

この世界、ガキが大人びていてもあまり疑問に思われないうところが動きやすいよね？

（貴方は何を知って・・・）

「それはそうと、試合が始まるみたいだ。（ちなみに、なのはに俺が魔法使えること喋ったら捻り千切るから）」

キックオフ・・・子供たちの掛け声と、大地をける音が聞こえる。
「おっ・・・」

俺が目をつけたのは、一人の少年

その少年だけ突出していた。

一人で三人抜きをし、パスを放ったと同時に自分がもっとも動きやすいところへと瞬時に理解し、移動する。

「ほう・・・なかなか」

俺はその華麗ともいえる行動に、感嘆する。

「アンタ、サッカーわかるの？」

何か、アリサが俺のことをなめたように言う。

「わかるものにも、聖祥のジダンっていや俺のことだぜ？」

言われてないけどね（笑）

「まあ、普通にサッカーぐらいならするよ？僕でも」

俺はミスで飛んできたボールを片手でうけると、にやりとする。

瞬間、膨大な魔力の活性化反応に気付いた。

「ん？」

「どうしたの？匠君」

なのはが急に止まった俺を覗き込む

「いや・・・気のせいだったようだ」

俺は目を伏せる。

起動しかかったジュエルシールドがあるなあ・・・

（マスターいいのですか？）

（ん？ああ、こいつも見送りだ。こいつはなのはに、魔法の危うさを教えてくれる）

(マスターは一体・・・)

「ハッピーエンドって好きだろう?」

「「「へ?」」」

三人が一齐にこちらを向く。

「いやこつちの話」

そして話は飛んで・・・

「君がなのはのいつていた。」

「そうですね。」

士朗さんに絡まれていた。

「いやじかに見ると・・・へえ、君、その歳で結構な使い手だね?」
俺は目を細める。

古武術、暗殺系を得意とするものを納めているとはいえ、こんなガキが強大な力を持っていることに疑問を覚えない、流石はと言ったところか

「ええ、古武術を習っていました。」

まあ千年ぐらいは暇だったからだけでも。

「でも、まだ体格的に一般人数十名との戦闘が限界ですけど」

あくまで、一般人を押ししておく・・・

ここで俺の見た、高町親子との戦闘は回避されたわけだけど
そこから、なのは達とおやつを楽しみながら(外で)

みんな、ばらばらに散っていった。

「んじゃ、なのは。ゆっくり休めよ?」

俺は不敵な笑顔を浮かべ、ふらふらとあぶなかつたので、家まで送ったなのはと別れる。

すぐさまバリアジャケットを展開し、例の暴発があった場所付近まで転移した。

『何をするわけでもなく、ただみとどけるだけですか?』

俺は微妙な顔をし、手に持った剣を見る。

「だなあ」

俺は大きい欠伸をし、体を伸ばす。

まばゆい光が起き、地響きがする。

その後、街全体を木々が覆った。

「始まったぜ」

なのはが意識を集中し、サーチする。

木々はそんななのはに気付いたのか、幸せな時間を終わらせまいと攻撃を仕掛けていった。

「なのは、あぶない」

ユーノが叫ぶが、サーチに意識を集中していたせいで、なのはの行動が一手遅れる。

「やれやれ・・・仕方ないなあ」

「防御は俺に任せて、サーチ封印に集中しろ！！」

「貴方は・・・」

なのはが驚きの声を上げる。

俺は迫りくる木々を一本、また一本と切り落としていく。

めんどくさくなくなってきたので、片目をつぶる

「汝、漆黒の闇より出で、願いの輝きを喰らいつくさん。」

『それは・・・』

「喰らわれた輝きは崩壊してゆき、残るのは虚無ばかり・・・」

『始動・・・』

「hope eater」

俺から漆黒の闇が漏れ出してきた、それに木の一部が触れた瞬間、木が急速に枯れていく

「すごい。」

淫獣から、感嘆が漏れる。

「見つけた。でも、木が邪魔で・・・」

俺は即座にサーチし、剣を投げる

「モード2」

銃を手に、本体がある方に銃口を向けた。

『速度調整開始・・・オールコンプリート、弾道計算終了、使用者並びにその周囲にバリア展開、いつでも撃てますどうぞ』

「貫けそして破壊しろ」

トリガーを引くと、轟音とともに具現化した弾が飛んでいく。

幾重にも重なる木々に突っ込んでいったその弾は、木々を貫きその後、通り過ぎた時の衝撃でなぎ払った。

そして、弾は少年と少女が抱き合っている球体にめり込み止まる。

「封印しとけ、じゃあな」

なのはの封印が始まると同時に、俺は飛んでその場から離脱した。ふう……つかれた。

どことも知らないビルの屋上に、腰をかける。

『マスターって……ロリコンですか？』

俺は無言で、剣を放り投げようとする。

『ごめんなさい、マスター』

俺は手を止めて、微笑む

「わかればいい。」

さてと……どうやら未来視を使って修正された世界を見る必要があるな……

目立った介入は今のところ、Trick or treatだけだしなあ。

先が思いやられるよ。やれやれ

第6話：二人目の魔導士（匠視点）（前書き）

だ（ry
どうぞ

第6話：二人目の魔導士（匠視点）

どうも、家に誘われたのですが先日、未来視を発動してしまっただけで死にかけたので、今回はやめときました。

「うう、だるだる」

可愛くもないのに、そんな言葉をもらしながら床をころころと移動する。

『本当にしんどいなら、ねてればいいのに』

いぬき言葉だぞと言うツッコミをしようとして、自分もかなりしていることを思い出したのでやめておく。

「いやなの、僕は遊びたいの」

『うわ、元の性格知っているだけに、キモい・・・』

天国の母さん、最近パートナーであるはずのテイルの口がかなり悪いです。

俺は無言で私服に着替えると、テイルを腰につけて家を出た。

『どこに、行くのです？』

俺は軽くあくびをした後に軽く念話する。

（ん？ちよつと未来視した時に興味深いものを見たからね？）

俺はそういつつ、なのはと初めて会った公園へと着く

「やはり現れましたね？」

休日なのに、子供も人もいない公園に一人だけ、翼をはやし水色の髪を持ったかわいらしい感じの女の子がいる。

「その声、大天使長か。主神の側近が出てくるなんて珍しい。」

「主神自ら着たかったらしいのですが、何分事後処理がありました。」

・・・

苦笑いをする天使を睨む。

「で？俺の未来視に無理やり介入して、何が目的だ？」

「まったく、貴方は結果を急ぎ過ぎる性格ですね。」

少し舌打ちして、俺はブランコに座る。

しまらないなあ……

「とある神のグループが、貴方がおっている三人に聖具を横流ししていたんです。」

「それを知っていて、この世界に俺を落としたのか？」

俺はそれを聞き、いらつとなる。

聖具と言えば、まともな人間が立ち向かえば数秒で帰り打ちにされる代物ばかりだ。

それを神がながすなんてな……

「いえ、主神は知りませんでした。ですから、貴方のサポート役として私を……」

「いらん。」

『戦力は多い方がいいのでは？』

(それなら、俺の封印を解いてくれつての)

俺は軽く息を吸うと、隠していた俺の気を解放する。

「で？主神が来ない理由は、その事後処理か？」

「は……はい……」

俺の気迫に押されたのか、天使の言葉が弱弱しくなってきたのがわかる。

「流れた聖具はわかっているのか？」

天使は懐からリストを出すと読み上げていく

「グングニル、ミヨルニル、ヤールングレイプル、メギンギョルズですね。」

一人一つ、後半の二つは特殊だから二つで一つということとして……

「どれもこれも、三世代前の神が隠居する時に宝物殿に封印していたものじゃねーか」

「完全にこちらのミスです。」

勘弁してくれよ。あそこは13人の神しか立ち入りできないはずだろ？

「まさか、裏切り者が出たのか……」

俺はため息をつく

おいおい、まさか裏で手を引いていたのが神とかだったら流石に勝ち目ねーぞ。

「そこで私が……」

「勝手にしろ……」

俺はその公園から立ち去った。

しばらく歩いて行くと、ジュエルシード反応をとらえる。

結界反応が起き俺以外のすべての時間が遅くなった。

「へえここまで大きな結界はれるんだ。あの淫獣やるなあ」

『set up』

気のきいたテイルが展開する。

俺は転移魔法を発動すると、ユーノのそばに現れる。

「おーやつとる、ねえ」

「貴方は……」

ユーノは警戒したそぶりを見せるが、俺は構わず座る。

「バリアジャケットは解除できないけど、まあ心配するな。」

俺はなのはとフェイトを見つめる。

「一撃一撃が大きい、あたれば決定打だろうんだけど、動きが遅いな

あ

「たいしてフェイトの方は、一撃の威力はなのはに劣るものの機動性、戦術ともに問題がない」

「でも、ジュエルシードを渡すわけには……」

「それは、誰が決めたことだい？」

ユーノは首を上げ俺を見上げる。

「え？」

「ガキはガキらしく生きろってことだよ」

俺は軽く咳払いし、ごめんねとつぶやいたフェイトのフォトンラッサーを受け止めるためになのはとフェイトのあいだに、出現した。

「え？」

一瞬、フェイトの驚く顔が見える。

だが発射された魔法は止まらずに、俺に直撃した。

金色の魔力が俺にぶつかる。

「はっ」

『プロテクション』

あっけなくはじいた。

「その白いの、動くな」

俺はテイルをなのはにつきつける。

「黒いのここは俺が見ている。さっさとジュエルシードを持っていけ。」

「何を」

ユーノが驚きの声を上げる。

「白いのに怪我をさせたいのか？バトルは白いのの負けだ。おとなしく引け。」

「ありがとうございます。」

そう、フェイトがつぶやくとシーリングを終わらし、さっそうとどこかに飛んでいく。

なのはが何かを言いたそうに、俺のことを見ている。

「さてと、顔見せも済んだし」

『顔見せてませんけどね』

「やかましい。俺は帰りますか。」

取り残された、口を半開きにし惚けた表情のユーノと、なのはだった。

side フェイト

あの黒衣の魔導士は誰だったんだろう？

非殺傷設定とはいえ、私のフォトンランサーを受け止めそのまま相殺するなんて……

それに、投げ捨てた言い方でも、あの人からは優しさを感じた。

私は他人なのに……

side なのは

あの黒衣の魔導士は一体誰なんだろうか？

それと、三人目の魔導士、あの子は一体……

考えれば考えるほど、泥沼にはまっていく思考を閉じた。

side 匠

「お帰りなさい」

家に帰ると、何故か大天使長がいた。

「お帰りなさいじゃね〜なんでいんだよ。」

「え？勝手にしろって言われましたので」

「アー確かに言ったけど、言った覚えはあるけどさあ。」

「この天野 美鈴。兄とともに、三人を追いかけますよ」

『もうすでに、兄設定ですか……』

「ほら、大天使長が歳に合わない……ごめんなさい。」

「るーたんは、許可したのか？」

「ええ、事情を話したら、好きにしていよいよと笑いながら」

「ああーたん後で覚えているよ……」

「つつかなんで俺が兄せつていなんだああああああ」

第7話・温泉に行こうぜ(前書き)

だぶ(ry

では始まります

第7話・温泉に行こうぜ

どうも、匠です。

今日は連休を活用して、温泉に来ています。

いいですよねえ、温泉。

心が現れるようですね。

「楽しみだね、おに〜ちゃん」

うるさい& amp; うざいのがいなければ……………なあ

『諦めてください、マスター』

俺は抱きつて来る美鈴をうっとおしそうに押しつけながら、俺は車を運転している（免許はいつの間にか持っていた）我が父親の顔を見る

「なあ、るーたん」

「なに、何故か運転の仕方知らないのに運転させられているから、後にしろ。」

俺はするりと、補助席に移動し車を止めさせる。

「リンク」

俺の感覚、記憶をるーたんリンクさせる。

「OK車のうんたんは、把握した。」

なぜ、うんたんなんだ？

ツッコミを入れようとしたが、車がチヨメチヨメD並みの走り方で走り始める。

やっべ〜、俺のドライビングテクそのまま流用しちゃった（テへ

「ちよつと〜ルシファ〜、死ぬ・・・事故起こしたら死ぬから」

そんな美鈴の声とともに、旅は続く。

side なのは

連休を使った、みんなでの旅行。

楽しいはずなのに、あの二人の黒い魔導士のことばかり考えてし

まいます。

男の子の方は、匠君とどこか雰囲気に近いと思うの。
どうしてそう思ったのか分からないけど……

side 匠

ようやく到着したころには、美鈴は目を回していて静かになって
いた。

「静かになったことだし、温泉行ってくる。」

俺が温泉につかって、のんびりしていると土朗さんとロリコンが
はいつてきた。

「おや、君は？」

「お久しぶりです。土朗さん」

俺は軽く会釈する。

「父さん彼は？」

「ああ、なのはの友人で天野 匠君だ。」

俺はすっと目を細める。

「言うことは恭也さんですね？」

同時に軽く殺気を流しておく。

「っっ」

土朗さんは顔色を変えなかったが、恭也は少し顔をしかめた。

「戯れが過ぎるよ？匠君」

土朗さんに叱られ、少し苦笑いを浮かべる。

「えっと、土朗さん達がいるってことは……なのは達もいるん
ですか？」

「ああ今、露店風呂に行ってるよ。」

肩を出していたのだが、お湯の中に肩をつけた。

(ユーノたん、もちろん女風呂に入っているよね)

(その声は、匠？た……たすけて)

悲痛そうな叫びをあげながら(?)俺にSOSを出してくる。

(うん、無理だし、それでたら俺がお前のご捻じり切りに行って

やるから、安心しろ)

(安心できない、安心できないからね?)

俺は軽く苦笑いをする。

「しかし、その体でよくあれだけの気を練れるね?」

「ええ、体術の基本は気ですから。僕の扱っているのは、外勤ですが・・・」

「外勤ってあれか?おもつきりぶんなぐる系の」

俺は軽く笑う

「違いますよ。練気のための運動の型のことです。つきつめていけば、内勤も扱って入るんですが。僕の習っていた武術では、いかに外勤を人外の力で発することができかですね。」

ようは・・・ぶち壊せと・・・

「なんつう、無茶な・・・」

「神速よりかはましですけどねえ」

ザバーと音と波が立つ

「そんなにあわてなくとも、なのはには言ってませんし」

俺はニヤニヤしながら、風呂を上がった。

うん、最高に気持ち良かった。

それから数分がたち

なのは達はと言うと・・・アルフさんに絡まれてた。

何やってんの・・・

(忠誠心の強いワンコだなあ)

(あなたは・・・)

無言でにらみ合う俺等に、なのはがおろおろしていて可愛い。

(ニンゲンに助けられて、感覚が鈍ったのかい?ワンコ)

威嚇してくるアルフに向けて、殺気を放つ。

(ふん、これごときで脅えるとわな・・・失望させられる。)

純粹な殺気、なのはも何故か感じているようで、そこは流石の高

町一族としか思えない。

「匠君こわいの」

やっとなのはが、口を開く。

「いやーなのはが、このお姉さんに虐められてるのかと思ってね？」

（俺はこの娘の味方でもあり、フェイトの味方だ。何故、ジュエルシードを集めているかも知っている）

（何を根拠に……）

「なんで、あんたがここにいるの？」

ふん……と鼻を鳴らしながら、アルフは去って行ってしまつ。

（プレシア・テストロツサ）

背中越しに、驚いたのは感じられたが。

「ん？家族旅行だよーただのね？」

「ちよつと家族が来てるの？」

あれ？アリサの反応……

「ああ妹に、義父がね」

「お兄ちゃん」

嫌な声が聞こえたので、逃げるとしますか……

「ちよつと逃げるな」

俺はもうダツシユで逃げた。

side 美鈴

あら？彼女たちは……

「えつと、誰なの？」

「匠の妹の美鈴と言います。」

「ええ、アイツに妹がいたの？」

私は、クスクスと笑つ。

どうやら、匠は私のことを言っていないみたいですね。

「えつと、天野グループの社長にはお子さんはいないはずじゃ」

この子が月村ね？

流石、おとなしくても鋭い。

「お兄ちゃんと私は、養子なのよ。」

「「「え?」「」」

三人は三人とも驚いた表情をしている。

「お兄ちゃんの実父は、事故でね。私のは・・・知らないかな?」

「そうだったの」

一人のつらさがわかっていているからか、なのはは顔を陰らせる。

「でも、今が幸せだからいいのよ。お兄ちゃんも私もね?」

side 匠

言わんでいいことをいつとるきがするのは、俺の気のせいか?

まあいい。

俺はるーたんのとなりに、ゆっくりと座る。

「お前、何かいろいろと言われているよ?」

るーたんのあきれた声が聞こえる。

「お前の元同族だろ? 何とかしろよ」

「ごめん、無理」

俺達はそろってため息をつく。

「何故、主審があんなのを送ってきたんだろうね?」

俺がそう問いかけると、るーたんは少しため息をつき

「楽しむためだろ」

と答えた。

その日の夜、俺はジュエルシードの反応をキャッチしたので、のっそりと起き上がる。

「せつとあつぷ〜」

寝起きなので、間の抜けた声でつぶやいた。

『マスターしっかりしてくださいよ』

「ん〜、めんどいんだよ。」

今日起こること知っているしね?

「とりあえず、転移かな?」

俺はいきなり、にらみあっているフェイト達の前に現れた。

「こんばんは、魔導士諸君」

「あんたは」

アルフが睨みつけるように俺のことを見ている。

「てるるなあ、そんなに見つめられて」

俺は軽く頭をかく

「まあ今回はその黒い・・・俺も黒いけど魔導士を邪魔しに来たんだけどね？」

俺はテイルを構える。

「さあアルフ？俺と踊ろうか」

俺はアルフに襲いかかると、離れた場所まで強制転移する。

アルフは臨戦態勢でこちらを向くが、俺はその場で座り込んだ。

「まあ座れよ。」

「アンタ、昼間の」

俺はバイザー越しに眼を細める。

「流石わんこ、鼻は効くようだね？」

俺はそういいつつ、軽くバイザーをとる

「ふうユーノにもアピールしてただけだね？あいつは気がつかなかったから」

「何が目的だい？」

睨まれ、ぞくぞく・・・失礼、びくんびくん・・・びくびくしながら不敵な笑顔を浮かべる

「ハッピーエンドさ」

「アルフには教えておいた方がよさそうだ・・・」

あっちは白熱してることだし、アレが起きるまで時間があるだろう。

「なんだい？」

「プレシア・テストロッサな。アレ操られているだけだぞ？」

「は？」

アルフがまぬけな声を・・・もともと、間抜けか。

「どついつことだい？アレが素じゃないと？」

「ああ、あれは操られてるだけだ。そういう能力を持った存在だからな、あいつ等は」

「あいつ等？」

俺は口の端をいびつにゆがめ、バイザーをつける。

「禁則事項だ。さてと、そろそろ行きますか。転移」

最近、転移多様しすぎだなあ

『私の見せ所はそれだけですもんね』

ちなみに転移した瞬間、俺の右腕はフェイトに貫かれ、バルディシュを抑え込み、左手で持ったテイルはなのはの首元に当たっている。

修正された世界では、なのはの首にバルディシュが刺さるという世界だったのだ。

『put out』

俺がなにも言わないうちに、レイジングハートが理解したのか、ジュエルシードを出す。

「レイジングハート!？」

なのはが驚きの声を上げる。

「いいデバイスを持ったな？どこぞのクソフェレットと違って、主人に優しいじゃないか」

俺はそういうとジュエルシードを、フェイトに投げた。

「それは元来、君のものだ受け取れ」

「え？でも……」

俺は少しうなずく

「さっさと行け」

俺が気迫を込めると、フェイトは逃げるように飛んでいく。

「待って、貴女の名前は？」

なのはがフェイトを呼びとめる。

「フェイト……フェイト・テストロッサ」

「私は……」

自分の名前を言おうとするのはを無視して、フェイトはどこかえ消えてしまった。

「さてと、俺も」

「待って、君の名前は？」

俺はため息をつく。

「それより、結界を張っていなかったみたいだが旅館の方は大丈夫か？」

旅館には明かりがとまり、こちらに二、三人、向かってきているのが見える。

「ふええええええ」

あわてて帰っていくのはを、暖かい目で見ながら俺はほほえましくなりながらも軽くあくびをする。

「眠いし帰るか」

そのまま旅館の部屋まで転移した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113p/>

魔法少女リリカルなのは～魔の王となる少年～

2010年12月2日00時55分発行